わが街わが故郷

宇都宮機器株式会社と宇都宮市

会社紹介

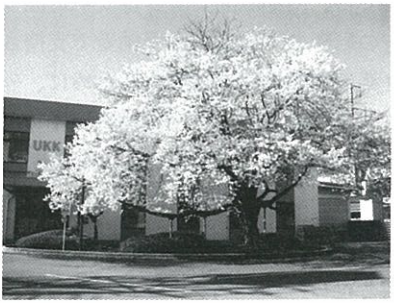
当社は1953年の創立で、当初エンジン用スモールリテーナーを生産していました。その後1956年、ニードルローラーリテーナーの生産を本格的に開始し、1962年には旧光洋精工株式会社の企業集団に参加し、グループのニードル部門を担当する会社として自動車産業の発展とともに今日まで拡大してきました。

現在は、多様化するお客様のニーズに対応するための技術開発、省エネ・省資源に取り組み、軽量・コンパクトで高付加容量を受けることのできる、地球環境に優しい商品としてのニードルローラーベアリングの製造に取り組んでおります。

近隣では、正面玄関前の「１本の大きな桜の会社」で有名です。

従業員数は234名、工場敷地面積は24,753㎡。

宇都宮機器株式会社全景



正面玄関前

宇都宮の紹介

宇都宮は、緑濃い日光連山と鬼怒川の清流に恵まれた栃木県の中央、関東平野の北端、東京から約100kmの距離に位置し、江戸時代には日光街道と奥州街道が分岐する要衝、日光・江戸を控えての防衛の要地として栄えてきました。

「宇都宮」は、約1,600年前宇都宮の始祖、豊城入彦命を祀る二荒山神社が「下野一の宮」といわれており、この一の宮がなまっていつしか宇都宮となったといわれています。

宇都宮市は、平成18年度に市制110周年を迎え、平成19年3月31日には周辺２町と合併し、北関東で初めて50万都市となりました。

また、宇都宮市では、平成17年度から３Ｒ（Reduce：減らす、Reuse：再び使う、Recycle：再資源化）及び地球温暖化対策の推進並びにおもてなしの心の醸成を図るため、「もったいな

い運動」に取り組んでいます。この運動の全国的な推進と市民の意識の高揚と行動につなげるため、全国の自治体やNPO・一般事業者を対象に「第１回もったいない全国大会」を開催しました。この大会の中で、基調講演や事例発表、情報交換などが行われました。

第１回：もったいない全国大会

開催日：平成19年８月28日（火曜日）から29日（水曜日）

会　場：栃木県総合文化センター（栃木県宇都宮市本町1-8）ほか

主　催：もったいない全国大会実行委員会

宇都宮の名所・名物

（宇都宮城）

宇都宮城を築いたのは、平安時代後期藤原秀郷とも藤原宗円とも言われており、中世の城主であった宇都宮氏は鎌倉幕府の有力な御家人であるとともに、京都とも繋がりが深く、５代頼綱（よりつな：蓮生）は百人一首の成立にも深く関わっていました。

日本中が戦乱に巻き込まれた南北朝時代から戦国時代、宇都宮城は敵の攻撃に備えるため、堀と土塁を幾重にもめぐらせた守りの堅い城になっていきました。約500年間宇都宮を支配してきた宇都宮氏は、豊臣秀吉に滅ぼされ、その後江戸時代には譜代大名の居城となりました。

宇都宮城は、将軍が日光社参する時の宿泊所であり、本丸には将軍のための御成御殿が建てられました。江戸時代初期、徳川家康の重臣本多正純が２代将軍徳川秀忠の日光社参の際に暗殺を企てたといわれる「釣り天井」の伝説は、水戸黄門のテレビドラマ等になりご存知の方も多いのではないでしょうか。

通算11家、47代の城主が住んだこの宇都宮城は、1868年（明治元年）戊辰戦争の兵火を浴び全焼し、さらに第二次世界大戦の時に空襲に遭いほぼ消滅し、一部残った本丸が公園となり、「御本丸公園」として市民に慕われていました。

本年、残った本丸に継ぎ足す形で宇都宮城の一部が復元され、宇都宮城に関する資料を見ることができます。

宇都宮城

（大谷地区）

大谷石（おおやいし）は、約2千万年前に火山活動により生まれた緑色凝灰岩で、宇都宮北西部の大谷地区一帯で採取されます。暖かみのある肌合いが特徴で、軽くて加工がしやすく耐久性にも優れるため、さまざまな建造物に使われており、1922年に竣工した大谷石で造られた旧帝国ホテル（現在は愛知県の「明治村」に保存）が翌年の関東大震災にも耐え、その耐久性が広く認められました。

大谷地区には、全高27ｍの平和観音や日本最古の石仏（大谷観音）、石造りの街並みなど、付近には見所もたくさんあります。中でも、大谷石採掘場跡の巨大地下空間は圧巻です。地下空洞は、温度が８℃前後と一年を通して安定しており、生ハムを熟成するための貯蔵庫として利用するほか、コンサートや展示会等にも使われています。

また、近くの森林公園周辺では、日本で開催される自転車競技において最高峰に位置する「ジャパンカップサイクルロードレース」が開催され、世界各地からアスリートが集います。

平和観音

大谷観音

（篠原家）

宇都宮市を代表する旧家の一つである篠原家は、江戸時代から奥州街道口の現在の場所で、醤油醸造業や肥料商を営んでいました。

篠原家

現在の旧篠原家住宅は、1895年（明治28年）に建てられたもので、第二次世界大戦の戦災により、母屋と石倉３棟を残して、醤油醸造蔵や米倉などの建物は焼失してしまいましたが、明治時代の豪商の姿を今日に伝える貴重な建造物となっています。

黒漆喰や大谷石を用いた外壁や、商家を特徴付ける店先の格子などとともに、1・2階合わせて100坪という規模の大きさが、堂々たる風格を形作り、JR宇都宮駅前の歴史的シンボルとなっています。

（餃　子）

宇都宮といえば…、餃子が近年有名ですが、餃子の火付け役は、平成５年10月から平成６年２月まで放映された「おまかせ山田商会」が宇都宮餃子大作戦と称し番組で紹介したことにあるようです。そのPR作戦としてできた餃子の像は、JR宇都宮駅東口にあり餃子の皮でヴィーナスを包んだ形をし、大谷石でできています。

餃子像

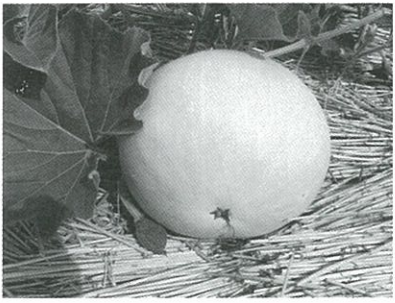
餃子の歴史は宇都宮に昔、旧陸軍第14師団の駐屯地があり、餃子のメッカである中国東北部に遠征し、大陸で覚えた味を持ち帰って広まっていったといわれます。

餃子は焼き、揚げ、水が基本ですが「フライ餃子」等の変わり餃子も多く、現在約150種類ぐらいあるようです。具材の一つ、ニラの生産が全国第１位ということも関係しているかもしれません。

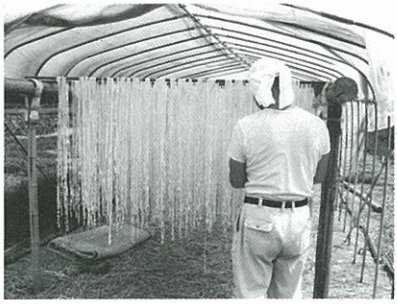
毎年11月の第１土日には、「宇都宮餃子祭り」を開催しています。

（干　瓢）

宇都宮市の南部（当社の所在地）から南のしもつけ市・上三川町は、干瓢の産地で日本の干瓢生産の８割以上を占めています。以前は関西が栽培の中心であり、安藤広重の東海道五十三次では水口宿（現在の滋賀県甲賀市）の絵には干瓢を干す姿が描かれています。1712年（正徳２年）に近江国水口藩から下野国壬生藩（現在の栃木県下都賀郡壬生町）に国替えになった鳥居忠英が、干瓢の栽培を奨励したことが、今日の栃木県の干瓢生産の興隆につながっています。



干瓢玉



干瓢干しの様子

干瓢は、夕顔の果肉を帯状に削り取り、天日に干したもので、夕顔は生よりも、干した方が風味と味が良くなることと、長期間の保存に耐えることからこの方法がとられているようです。

また、夕顔を自然乾燥してできる「ふくべ」は、昔から炭入れ、小物入れなどに使用されています。

（カクテルとジャズ）

意外と知られていない宇都宮の顔が、「カクテルのまち・宇都宮」と「ジャズのまち・宇都宮」です。

カクテルは、世界・全国コンテストで優勝・入賞したハイレベルなバーテンダーが15人おり、達人クラスのバーテンダーを中心に約40店のバーで結成された宇都宮カクテルクラブがあります。

また、宇都宮は、日本を代表するジャズのトッププレーヤー渡辺貞夫氏を輩出しており、「ジャズのまち」にと、2001年８月、宇都宮市と各民間団体の代表が「うつのみやジャズのまち委員会」を立ち上げ、数々の音楽イベントに取り組んでいます。ジャズを中心とした軽音楽活動の発表の場を中心市街地の街角やJR宇都宮駅において、広く市民に公開し、軽音楽の振興と「ジャズのまち・宇都宮」をアピールしています。

（駅　弁）

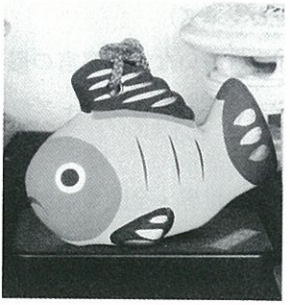
宇都宮は、駅弁発祥の地。日本で初めて発売された駅弁は、1885年（明治18年）JR宇都宮駅で発売された「白木屋」の弁当です。

弁当は、黒ゴマをまぶしたおにぎりとたくあん２個を竹の皮で包んであり、当時の価格は５銭でした。

（郷土玩具「黄ぶな」）

宇都宮には、江戸時代から伝わる郷土玩具「黄ぶな」（張子）があります。

黄ぶなは、昔天然痘が流行したとき、田川（JR宇都宮駅前）で釣り上げた黄色の鮒を病人に与えたらすっかり治ったという伝説から名付けられ、顔が赤いのは、だるま、赤ベコと同様「赤もの」といって魔除けの意味をもっており、以来当地では、新年に黄ぶなの張子を神棚に飾り、無病息災を祈る習慣が残っています。



黄ぶな

（雷）

栃木県は日本でも有数の雷の多い県です。北部が1000～2000ｍ級の山岳部であり、南東方向に山の斜面が開いているため、日射を強く受けます。さらに夏季は南よりの風が吹きやすいため、強い上昇気流がおこり雷が発生します。

年間の雷日数では宇都宮が24日で、関東地方では一番多くなっています。

（宇都宮機器株式会社　佐久間 昌平）